

# 『万葉集』三三三六番歌考

——筑紫の宴と志向する「今」をめぐる——

鈴木 喬

はじめに

『万葉集』において筑紫の特産物である「綿」が次のようにうたわれている。

沙弥満誓、綿を詠む歌一首 造筑紫観音寺別当、俗姓  
は笠朝臣麻呂也  
・白縫<sup>しろぬい</sup> 筑紫の綿は 身に付けて いまだは着ねど 暖け  
く見ゆ (③三三三六)  
(しらぬひ) 筑紫の綿は、まだ身につけて着てはいないけれど、暖かそうにみえる)

大伴旅人が大宰府長官時における沙弥満誓の歌である当該歌は、宴席の歌であるとされ、歌の背景にある大伴

旅人の状況はもちろんのこと、歌われた場の問題が具体的に議論されてきた。当該歌に先行する三三一八―三三三五番歌の宴席の歌群と同じ場で歌われたものと捉える<sup>二</sup>説や、「綿」を筑紫の女性の寓意ととらえる<sup>三</sup>説など指摘されてきた。

無論、題詞に書かれていないことで歌を理解することは、推測の域を出るものではない。歌の場の想定には限界があり、作品としてどのように読み取れるかが重要であろう。また当該歌は、譬喩歌に収録されず、雑歌に配列される。歌の集まりとして考えると、寓意性を有すると認められても、当該歌において『万葉集』の編纂者の志向は、「雑歌」であり、寓意にはないとみられる。

また当該歌に用いられる「綿」は、<sup>四</sup>大久保廣行が木簡などから指摘するように、筑紫における特産物としての実

態があり、それを前提として筑紫滞在の万葉びとにおいて共有され、和歌として形成、昇華されたと考えられる。そのため、歌表現に用いられる、この「綿」の筑紫での状況を理解しなければ、当該歌を理解できたことにならぬ。

そこで本論では、今一度、当該歌が置かれている配列や表現をおさえながら、特産物の実態を考察し、歌の解釈を考えていく。

## 一、配列から見る三三三六番歌

当該三三三六番歌は、沙弥満誓の歌であり、『万葉集』において次のように配列され、<sup>五</sup>伊藤博は、これらの歌群について大伴旅人を中心とする一つの宴席の場と想定する。

### 大宰少弐小野老朝臣の歌一首

①あをによし 奈良の都は 咲く花の にはふがごとく 今盛りなり (三三二八)

(あをによし) 奈良の都は、咲く花の美しく薫るがごとく、今がまつ盛り)

### 防人司佑大伴四綱の歌二首

②やすみしし 我が大君の 敷きませる 国の中には 都し思ほゆ (三三二九)

(やすみしし) 我が大君が お治めになる国々のうち、(奈良の)都こそ一番懐かしく思われる)

③藤波の 花は盛りに なりにけり 奈良の都を 思はずや君 (三三三〇)

(藤の花は盛りになりました。奈良の都を 思い出されますか、あなたさまは)

### 帥大伴卿の歌五首

④我が盛り またをちめやも ほとほとに 奈良の都を 見ずかなりなむ (三三三一)

(私の盛りが、また戻ってくるのだろうか。もしかして 奈良の都を 見ずに終わってしまうのだろうか)

⑤我が命も 常にはあらぬか 昔見し 象きまの小川を 行きて見むため (三三三二)

(私の命も 永遠であってくだらないだろうか。昔見た 吉野の象の小川を もう一度行つて見るために)

⑥浅茅原 つばらつばらに 物思へば 古りにし里し 思ほゆるかも (三三三三)

(あさぢ原) つくづくとものを思っていると、ふるさとのことが 思い出されてならない)

⑦忘れ草 我が紐に付く 香具山の 古りにし里を 忘れむがため (三三三四)

(忘れ草を 私の下紐に付けたのだ。香具山の ふるさとを忘れるために)

⑧我が行きは 久にはあらじ 夢のわだ 瀬にはならずて 淵にもありこそ (三三三五)

(私の旅は もう長くはあるまい。(吉野川の) 夢のわだよ、どわか瀬にならず 淵のまままでいてくれ)

沙弥満誓、綿を詠む歌一首 造筑紫観音寺別当、俗姓は笠朝臣麻呂也

・白縫しろぬい 筑紫の綿は 身に付けて いまだは着ねど 暖けく見ゆ

(三三六)

山上憶良臣、宴を罷る歌一首

⑨憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つ  
らむそ (三三七)

(憶良めは ここて失礼いたしました。子どもが泣いているで  
しょうし その母親も私を待っていることでしょうか)

①は、小野老おのが天平元年(七二九)大宰府に赴任した際の宴の歌とされる。「にほふ」は本来、視覚的に美しいことをあらわすが、「にほふがごとく」を原文では、「薫如」と記し、「薫」字が嗅覚的な字義をあらわすことから、視覚でも嗅覚でも、「花が盛り」だと表現しているといえる。そのような都は、今まさに栄華を誇ると都を讃える歌となっている。一方、小野老を含め宴席出席者は、対極にある鄙の地、筑紫大宰府に身を置く。栄えている都を遠くから想う「望郷歌」の構造を有する。「みやこ」と「ひな」の対立構造を一首は表現する。②は「国の中には都し思ほゆ」と、自身が勤務する筑紫ではなく、「都」が思い出されると表現する。③は、大宰府の長官である大伴旅人に「奈良の都を思はずや君」と、筑紫の地にて花が盛りの時期にあつて、都を想い奈良の都の讚美が歌われる。

『万葉集』卷三の雑歌の約八割が旅の歌とされ、

・いざ子ども 大和へ早く 白菅すげの 真野まのの 榛原はきはら 手折りて行か

む

(二八〇)

(さあ皆の者、大和へ早く帰ろう。白菅の 生えている真野の榛の林の枝を、(旅の記念に) 手折って帰ろう)

・伊勢の海の 沖つ白波 花にもが 包みて妹が 家づとにせむ

(三〇六)

(伊勢の海の 沖の白波が 花であつたらよいのに。 それを包んで妻への土産にしよう)

奈良の都や家にいる妻を想い歌うように、卷一、二に比して、私的な感情を表出する歌が多い。歌の場は旅にあつて、その視線は強い郷愁とともに都に向いている。①から③も宴席の歌ではあるものの、都から離れた筑紫大宰府の地にて、一種の旅の歌の構造を有する。

続く、大伴旅人の④から⑧も、「古りにし里し 思ほゆるかも」と都を見たい、忘れられないと心中を吐露する。④は、①や③の「盛り」を受けたものであり、栄華を誇る都と、鄙の地において、衰えていくばかりの自身が対比される。大伴旅人個人の想いではなく宴席の出席者と想いを共有したものと思われる。これら大宰府官人は、眼前の筑紫のものではなく、「見る」ことの対象は「都」にあり、故郷や家を思う、旅の歌の様式を有する。大宰府という任地においても都や家から離れた旅路であり、表出される思いの先は都にあるのである。

他の巻においても、筑紫大宰府に赴任した官人たちは、望郷の想いを歌う。卷五の梅花の宴(梅の花歌三十二首)

において、

・梅の花 折りかざしつづ 諸人の 遊ぶを見れば 都しぞ思ふ (5)八四三

(梅の花を 折って髪にさしながら みなさんが遊んでいるのを見たと 都のことを思い出されます)

梅花宴を興じる、みやびな筑紫の官人たちの振る舞いを見ると、都での生活が思いだされると歌う。また「梅の花歌三十二首」の後に配列された「六員外故郷を思ふ歌」では、

・我が盛り いたくくたちぬ 雲に飛ぶ 薬食むとも またをちめやも (5)八四七

(私が身の盛りは すっかり過ぎた。空を飛ぶ 仙薬をのんでも、また若返ることはないだろう)

・雲に飛ぶ 薬食むよは 都見ば 賤しき我が身 またをちぬべし (5)八四八

(空を飛ぶ 仙薬なんかを飲むよりも、都を見れば賤しき我が身もまた若返るに違いない)

④と同様「我が盛り」や「をちめやも」が表現され、対比的に衰えゆく自身が表現される。鄙の地に、歳を重ねることの焦り、無常の想いのなかで、仙薬よりも都を見れば若返るのだと表現する。都への強い想いとそれが叶わない焦燥感が出される。気象においても望郷の想いを起こさせ、

大宰帥大伴卿、冬の日に雪を見て、京を憶ふ歌一首  
・沫雪のほどるほどるに降り敷けば 奈良の都し 思ほゆるかも

(沫雪が うつすら地面に降り積もると 奈良の都が 思い出される) (8)一六三九

筑紫の地に降る雪が郷愁の想いを引き出すと歌いあげる。鄙で催される宴の一つの型であったとみてよい。

一方、沙弥満誓の当該歌と、つづく⑨の山上憶良の歌は望郷の想いを表現しない。大久保廣行は、当該三三六番歌と、⑨の憶良の歌は、題詞において

大宰少式小野老朝臣の歌一首 (三三二八)

防人司佑大伴四綱の歌二首 (三三二九・三三三〇)

帥大伴卿の歌五首 (三三三一〜三三三五)

沙弥満誓、綿を詠む歌一首 (三三三六)

山上憶良臣、宴を罷る歌一首 (三三三七)

三三六、三三七番歌には、人名に官職名の記載が無く、また題詞が「(人名)の歌」とあるのに対し、「綿を詠める」「宴を罷る歌」と記載様式が異なることや、さらには③に「藤波の花」が詠まれる初夏において、「綿」を取り上げ、「暖かさ」を讚えるのは季節に合わないとし、①から⑧とは、別の場であると指摘する。

しかし、そもそも①の題詞において詳細な宴の場に関する記載がないことから、①から⑧も配列的なまとまりで、同じ場であると享受者である我々が想定しているにすぎない。実態的には異なる場であっても、「宴」の場というまとまり以外に、配列された編者の意図を読み取ることは、留意しなくてはならない。

また題詞の記載様式が異なるものも、望郷を歌う歌々と、

詠題を有する歌という、一見すると大きな隔たりに見えるものの、「宴」の歌という、緩やかな大きなまとまりにおいて共通している。

## 二、雑歌に収録される三三六番歌

当該三三六番歌は、<sup>七</sup>岸本由豆流『萬葉集攷証』が「この歌譬喩の歌にて、満誓、女など見られて、たはぶれに詠れたるにて、かの綿を積かさねなどしたるが、暖げに見ゆるを、女によそへられたるにもあるべし」として以来、<sup>八</sup>新全集が「異性の寝心地の良さそうなさまを読んだものか」と述べるように、「綿」を筑紫の女に譬えた寓意歌である<sup>九</sup>可能性が指摘される。<sup>一〇</sup>市村宏などは、その満誓の男女関係の実態的な様相を言及をする。また<sup>一一</sup>大久保廣行は「譬喩表現を巧みに駆使し、相聞的な発想をからませた表出が満誓歌の顕著な傾向」とし、綿に寓意を込めることが、むしろ満誓歌の特徴であるとも指摘する。

たしかに当該歌の「身に付けて いまだは着ねど」は、次の一二九六番にも見える。

・今作る 斑の衣 面影に 我に思ほゆ いまだ着ねども

(⑧一二九六)

(今まさに縫い上がる まだらの衣は 幻となつて私には身近に  
思われる。まだ手を通していないけれど)

「近く結婚できる見通しができている」ことを譬喩した歌とされる。そのため、当該歌においても、男女間の寓意を持つことの可能性を認めることができる。またさらに⑨に「子」や「妻」が表現されるのも、そのような当該歌の寓意を受けてのものとも考えられる。しかし、一二九六番歌は、巻八の譬喩歌「衣に寄する」に収録されており、雑歌に収録される当該歌と同列に扱うことはできない。

当該歌が収録される『万葉集』巻三にも、「譬喩歌」の部立てがあり、沙弥満誓の歌が二首収録されている。

造筑紫観世音寺別当沙弥満誓の歌一首

⑩とぶさ立て 足柄山に 舟木伐り 木に伐り行きつ あたら舟木を (三九一)

(とぶさを立てて せつかく 足柄山で船材になる良い木を伐つたのに ただの材木として伐って行ったよ。立派な舟木になったものを)

⑪見えすとも 誰れ恋ひざらめ 山のはに いさよふ月を よそに見てしか (三九三)

(見えなくても 誰が恋しくもないものだろうか。山の端に 出かけている月を、よそ目にも見たいものだ)

⑩は、<sup>一二</sup>新大系および<sup>一三</sup>岩波文庫が「思いをかけた美女が凡庸な男に嫁したことを惜しむ心であろうか」と指摘するように、男が想う女を「舟木」に譬え、それが他の男に取られたことの寓意を持つ。⑪は、なかなか見ることができない女を「いさよふ月」に譬え、男の見たい願望を表現する。仮に、当該歌も編者において寓意を主眼に持つもの

であるならば、⑩⑪と同じく譬喩歌に収載されるはずである。当該歌は、むしろ配列においては大宰府の宴席歌として①から⑨において機能していると考えるべきである。

①から⑧において、都を見たいと望郷の念を表現する。いわば旅の歌の型において表現される一つの様式であった。それに連なる当該歌は、「筑紫の綿」が暖かそうにみえると、その視座は、筑紫に置かれる。

『万葉集』巻三が、ある主題を基準として編集されていることは、夙に知られていることである。たとえば『全注』（万葉集巻三概説）が指摘するように、「式部卿藤原宇合卿、難波の都を改め造らしめらるる時に作る歌一首」が

・昔こそ難波ゐなかと言はれけめ今は都引き都びにけり

(三二二)

(昔こそ難波田舎と言われたであろう、今は都を移して、都らしくなったものだ)

主眼が「今」に置かれているのに対し、続く土理宣令の

・み吉野の 滝の白波 知らねども 語りし継げば 古思ほゆ

(三二三)

(吉野の 宮滝の白波よ。昔のことは知らないが 語り継いできたので その昔のことが思い出される)

と、「いにしへ」に主眼が置かれる。三二二番歌と三二三番歌が「新」と「古」の対比がテーマとして組みをなす。さらに波多朝臣少足の次の歌は、

・さざれ波 磯越道なる 能登瀬川 音のさやけさ たぎつ瀬

とに (三二四)

(さざれ波が 磯を越すというその越の国へ行く道筋の 能登瀬川の 音がさやかに澄んで聞こえることよ。激しく流れる瀬ごとくに)

越の国の歌であり、先の三二二番歌と連関しない。この歌の「たぎつ瀬」は、三二三番歌の「滝」との連想において配列されたものと考えられる。このように巻三は、強い主題とつながり、緩やかなつながりに対して配列されていることは留意される。

### 三、今を生きる想い

当該歌が①～⑨の歌と同じ場で歌われた歌を前提とする、<sup>五</sup>伊藤益の「望郷の歌々の閉めとして」表現された「座の文芸」とする当該歌の理解は、題詞において「場」の記述が無い以上、推測の域を出るものではない。しかし、配列された歌群である以上、何かしらの構造を有するのではないだろうか。本節では、「筑紫の綿」を中心に当該歌と、①～⑨の歌群に配されることの意味を考えてみたい。

当該歌が「筑紫の綿」と表現するように<sup>六</sup>「綿」は筑紫の特産物であった。『日本書紀』天武十四年十一月二日条に「筑紫大宰、儲用の物、絶一百疋、絲一百斤、布三百端、庸布四百常、鐵一萬斤、箭竹二千連を請ふ。筑紫に送り下す」という記事がみえ、儲用の物として大宰府が都に

請求する品に「綿」が含まれていないことから、天武十四年の段階で、綿は既に筑紫の産物として定着していたことが推測できる。さらに『続日本紀』天平元年（七二九）九月三日条によれば「大宰府に仰せて、調綿一十万屯を進めしむ」と大宰府から奈良の都へ大量の綿が貢進されたことがわかる。当該歌の「筑紫」は九州全体をあらわし、次の<sup>一七</sup>平城宮出土木簡にみられるように

・筑前国怡土郡調綿壹伯屯 四両 養老七年

『日本古代木簡選』

・肥後国怡志郡調綿壹伯屯 四両 養老七年

『平城宮木簡 一』

・肥前国神埼郡調綿壹伯屯

□亀二年

『平城宮木簡 一』

九州各地から奈良の都に「綿」が貢進されている実態がわかる。木簡に記載される「百屯」は、約二十二・五kgに相当し、郡ごとにまとめて綿の包みに木簡が付けられていたと考えられている。また木簡に使用される材がいずれも広葉樹であり、切り込みの形状が同じであることから、<sup>一八</sup>酒井芳司によると「長年蓄積していた真綿を都に貢進する時に、諸国進上の旧荷札木簡の内容を、大宰府が一括して新荷札に転記して作成した」とし、大宰府の地に西海道諸国から

綿が<sup>一九</sup>集められていたと考えられている。西海道諸国（九州各地）から大宰府に納められる「綿」において、大宰府の官人たちにとつて、日常業務において目に触れる機会は多くあったものと考えられる。大宰府役人たちにおいて「筑紫の綿」は大宰府の生活そのものをさすといえる。

他の万葉びとが都を想い歌で表現するのに対し、沙弥満誓の三三六番歌は、目の前の「筑紫綿」、つまり大宰府の生活の「いま」を歌うのである。

沙弥満誓の当該歌は、

・しらぬひ 筑紫の綿は 身に付けて いまだは着ねど 暖けく

見ゆ

「暖けく見ゆ」と自発・可能の「ゆ」を用いて対象を表現する。

「見ゆ」は、「くば」などの条件節を伴いながら

・天さかる 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和鳥見

ゆ<sup>二〇</sup> (③二五)

(あまざかる) 遠い鄙からの長い道のりを (我が家を) 恋しく やって来ると 明石の海峡から、大和の山々が見えてきた

・難波潟 潮干に立ちて 見渡せば 淡路の島に 鶴渡る見ゆ

(⑦一一六〇)

(難波潟の 干潟に立って見渡すと 淡路の島をめざして 鶴が 飛んで行くのが見える)

突然視界に入り、対象への讚美や、その美しさや感動等を表現する。そのため、<sup>二〇</sup>阿蘇瑞枝の『全歌講義』が「九

州産の上質の綿をほめる気持。中央から来た者として土地の特産の品をほめるのは、土地の行政監督者、ここは宴の主権者である大宰帥への讚美ともなろう。特産の綿が話題になり、現物が示されたりしたことも推測される。」という当該歌の評は、一定の説得力をもつ。

一方、当該歌の「筑紫綿」は、大宰府官人において日常目に触れているものである。そのため突然視界に入ることには考えにくい。見えているものが見えていない状態、当該歌の「見ゆ」は、見る側の主体性や志向性が失われた結果の状態をあらわす。さらにいえば、

・大君の 遠の朝廷と あり通ふ 鳥門を見れば 神代し思ほゆ

(③三〇四)

(わが大君の 遠く離れた政庁として 人々が往来する海峡を見ると、神代の時代が思われる)

「見れば思われる」のように、「見る」ことよって導き出される思いがあるなか、「見る」ことの主体性の欠如は、そのような連動が起らない状態にある。それはすなわち、都を想い歌う大伴旅人たち大宰府官人の視座そのものだと思われる。ただし、「いまだは着ねど」や満誓自身も「見ゆ」と表現するように、沙弥満誓もまた旅人たち同様、都人として遠い鄙の地にて都への視座は共有しているとも言える。

大宰府において身近な「筑紫綿」を詠じる沙弥満誓は、「都

人であつた我々は筑紫の綿を身に付けようとも思わなかつたし、着たことはないけれど、実際に筑紫に来てみたら暖かそうに見えるではありませんか。みなさんも過去や都のことばかり思いをはせるけど、今は今です。」と、今見えるもの(筑紫綿)を見ようとする旅人たちに、まるで「今を生きる」ことを諭し、励ますが如く歌つたのではないだろうか。

続く憶良の⑨も、

⑨憶良らは 今は罷らむ 子泣くらむ それその母も 我を待つらむぞ

「今は」と歌中に表現する。

当時、筑前の国守であつた憶良は既に七十歳を超え、父を求め泣き騒ぐ幼子や、それを一人あやす幼い妻の存在は考えにくく、歌のフィクションであると考えられる。それが、三伊藤益が指摘するような「満座の笑いを誘う諧謔」であつたかは定かではない。確かに言えるのは、「今は」と表現しながら、妻と子という個人レベルにおける日常生活を表現するのである。その視座は、沙弥満誓の当該歌とも共通するのではないだろうか。

旅の歌の一種として、都への想いをもつて筑紫大宰府の宴の歌は表現される。一方で、梅花の宴で

・梅の花 今盛りなり 思ふどち かざしにしてな 今盛りなり

(⑤八二〇)



(梅の花は今満開だ 親しい皆様よ 髪に挿しましょうよ 今満開だ)

・梅の花 折りてかざせる 諸人は 今日の間は 楽しくあるべし (⑤八三二)  
(梅の花を折って髪に挿している 諸人は今日一日は、楽しそうだ)

今を楽しもうと歌う表現も存在した。同じく梅花の宴で、満誓は

・青柳 梅との花を 折りかざし 飲みての後は 散りぬともよし (⑤八二二)

(青柳と梅の花とを折って髪に挿し、楽しく飲んだその後は、散ってしまってもよい)

やはり「いま」を見ることを志向するのである。当該三三六番歌もまた、そのような歌として理解できるのではないだろうか。

#### 四、まとめ

以上、当該三三六番歌を配列や、「見る」ことの対象や大宰府官人の視座を中心に考察した。当該歌の前に配される歌群が望郷の想いを表現し、今みることの出来ない「都」を歌うのに対し、当該歌および憶良の歌は、「いま」を歌う。そのような対立構造において、当該「大宰府宴」歌群は、編者によって配列されたものと考えられる。

大宰府の宴の歌は、旅の歌の郷愁を歌う様式によって表現される一方、旅の歌には眼前のモノを賛美するものがある。

・天地の 分れし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は (③三二七)

(天と地とが 分かれた神代の遠い昔から 神々しくて高く尊い駿河の国にある 富士の高嶺を 大空はるかに 振り仰いで見やると 空を渡る日の光も隠れ 照る月の光も見えない。白雲も行くのをためらい 時となくいとも雪は降り積もっていることだ。いつまでも語り継いで行こう この富士の高嶺を)

このような眼前に見えるものを讚美する様式が大宰府の宴の歌には見えない。しかし、当該歌の「筑紫十の十綿」と表現される「地名十の十名詞」には、「田口益人大夫、上野の国司に任ずる時に、駿河の清見の崎に至りて作る歌」にみえる

・廬原の 清見の崎の 三保の浦の 豊けき見つつ 物思ひもなし (③二九六)

(廬原の清見の崎の、三保の浦の広々とした海原を見ていると、何の心配事もない)

のように、「地名十の十名詞」山や島など、眼前に見える讚美の対象となる景であった。卷三の雑歌として三三六番歌に配列される、当該歌の編者の主眼は「今を見る」こと

であつたと理解できる。

(注)

- 一 『万葉集』の本文は、小島憲之他校注・訳『新日本文学全集 萬葉集』①～④(小学館、一九九四～一九九六年)を用い、意識は筆者による。
- 二 伊藤博(一九七五)「古代の歌壇」『萬葉集の表現と方法 上』(第二章第一節)(初出、『和歌文学講座 第三卷』桜楓社、一九六九年)など
- 三 岸本由豆流(一八二八)『萬葉集攷證』(『萬葉集叢書 第五輯』古今書院、一九二五年所収)、など
- 四 大久保廣行(二〇〇六)「筑紫文学圏と高橋虫麻呂」笠間書院(初出、「綿と紫草―筑紫文学圏の背景―」『文学論藻』第七五号、二〇〇一年)
- 五 伊藤博 前掲論文
- 六 作者にも複数の説があり、また「員外」の理解において、梅花の宴と同じ場で詠まれた歌という武田祐吉『全註釋』の指摘や、後に追和したとする澤瀉『注釋』の説に分かれる。本論では、その議論には立ち入らず、大宰府で行われた「宴席」の歌の一つとして解釈しておく。
- 七 岸本由豆流 前掲論文
- 八 小島憲之他校注・訳(一九九四)『新日本文学全集 萬葉集①』小学館
- 九 武田祐吉『全註釋』、伊藤博『釋注』、『新大系』など
- 一〇 市村 宏(一九六四)「沙弥満誓の恋」『万葉集新論』桜楓社

一一 伊藤 博前掲論文

一二 佐竹昭広他校注(一九九九)『新日本文学大系 萬葉集一』岩波書店

一三 佐竹昭広他校注(二〇一三)『万葉集(一)』(岩波文庫)岩波書店

一四 西宮一民『萬葉集全注 卷第三』有斐閣、一九八四年

一五 伊藤 益(二〇〇〇)「沙弥満誓の歌」『セミナー万葉の歌人と作品 第四卷』和泉書院

一六 当時の「綿」は、生糸を取ったあとにできる「真綿」(絹綿)をさす。

一七 木簡は奈良文化財研究所の「木簡庫」(<http://mokkanko.nabunken.go.jp/ja/>、二〇一九年三月二〇日検索)を利用した。

一八 九州歴史資料館(二〇一八)『大宰府史跡発掘50年記念特別展 大宰府への道―古代都市と交通―』九州歴史資料館

一九 それを裏付ける大宰府政庁出土の木簡等は、未だ例を見ないが、綿の集積地であつたことを想起させるものとして大宰府跡出土木簡に「綿鎖」と記された木簡がある。

二〇 阿蘇瑞枝(二〇〇六)『萬葉集全歌講義』笠間書院

二一 伊藤 益(一九九九)「逸脱の文芸―憶良罷宴歌の論」『倫理学』第十六号

(すずき たかし)